

近世イギリスとオランダ

——国境なきがごとく——

川 北 稔

はじめに

かつてイギリスとオランダとは、近代化・工業化に成功した国と成功しなかつた国の例としてとりあげられました。じ

つさい、この両国が一七世紀に、なかなか熾烈な経済競争を展開したことは、たとえば、一六五一年、なぜかクロムウェルの名を冠してよばれることの多い「航海法」が發布されて、イギリスの世界貿易からオランダ海運業が排除され、それをきっかけに三度のイギリス・オランダ戦争にさえつなりました。イギリスやオランダは、その意味で、近世に発生した主権国家——明確な国境線を引き、建

前上、その内部には国家権力以外の中間的な、たとえば地域や身分や職業による特権を容認しない国家——といったものの代表例といふことができます。

しかし、他方では、この両国の経済や社会には、相互の補完性も明確に読み取ることができます。一七世紀のイギリスとオランダは北西ヨーロッパ経済として一体のものとしてみるほうがわかりやすい一面もあるのです。とすれば、この時期において、両国の国境は、いったいどのような役割を果たしていたのでしょうか。

I 競争的補完

——広域経済と国民経済

a 毛織物業

一七世紀を中心とした近世のヨーロッパでは、毛織物業が最も重要な基幹産業であつたとされています。しかし、その毛織物業では、大きくわけて二つのタイプが区別されました。「旧毛織物」として知られる伝統的な、毛足の長い厚手の毛織物と、一六世紀にネーデルランド、つまりオランダ・ベルギー周辺で開発された薄手の新毛織物とです。後者では、バリー、サーイと呼ばれるものがよく知られています。

一七世紀のイギリス毛織物貿易を詳細

に研究したB・サプルによれば、イギリス毛織物業界が一六世紀の停滞を脱して一七世紀、とくに世紀後半に大発展を遂げるのは、この新毛織物をベースにすることでした。じつさい、イギリスの歴史だけを単独にみると一七世紀は、旧毛織物が消滅し、新毛織物に全面的に移行していく時代であつたといえます。一六〇〇年の輸出には、新毛織物はほとんど確認できないのに、一七〇〇年には、毛織物輸出のほぼ一〇〇パーセントが新毛織物となつたのです。

ほかの繊維品をみても、一七世紀には、エキゾチックな薄手の織物、つまり、コットンやシルクが大流行し、旧毛織物のなかにおいてさえ、比較的薄手のものが流行となつたので、イギリスがあえてオランダ起源の新毛織物へ転換したことは当時のイギリス人の経営感覚の鋭さを示すものとして評価されているのも理由が

ないわけではありません。

それなら、新毛織物の開発国であつたオランダは、どうしたのでしょうか。一六世紀までライデンを中心として繁栄を極めたオランダ毛織物業界は、一七世紀に入ると、じつは、旧毛織物業へ急速に傾斜していったことが知られています。ヨーロッパ全域に、新毛織物の人気が高まっていたことからすれば、これはイギリスとの競争に敗れたオランダが、なお比較的競争力の残っていた旧毛織物に生き残りの道を求めたもの、とみることもできますが、むしろ、イギリスのほうが、旧毛織物ではオランダに対抗できなかったとも考えられます。結局、両国の毛織物業界の棲み分けとみるほうが正しいのではないのでしょうか。

賃金がなお低くかつたイギリスでは、労働集約的な新毛織物のほうが有利で、先進国ゆえに高賃金のオランダ・ライデンでは、熟練した技術や資本を多くもち

いる旧毛織物が、まだしも競争力を保ちえたのでしょうか。このことは、逆に解釈すれば、イギリスは、伝統的な旧毛織物でオランダを圧倒するほどの力はなかつたのだ、ということもできるのです。オランダの方が高賃金で、職人や労働者にとつても魅力的であつたことは、のちにみる個人の移動の理由に明らかです。

いずれにせよ、こうしてイギリスとオランダを併せてみると、少なくとも一七世紀中頃までは、新旧毛織物は、ヨーロッパ内での地域的な棲み分けが進行したということもでき、必然史観の強かつた戦後史学というほどには、簡単にイギリスの勝利というわけにもいきません。たまたまイギリスが特化した新毛織物のほうに、たまたま流行の波がきただけということかもしれないのです。

b 綿織物の輸入禁止

同様の問題は、新しい繊維品であつた

コットンについてもみられます。一七世紀イギリスではコットンが大流行し、一大ブームとなりました。その結果、伝統的な毛織物業界は危機感を抱き、キャラコの輸入禁止を強く議会に働きかけました。キャラコ論争として知られる動向です。論争は、一七〇〇年と一七二〇年に、

それぞれ「キャラコ輸入禁止法」と「キャラコ使用禁止法」が制定されて、毛織物業界の勝利に終わったとされています。毛織物業界は、かねて、国民経済の屋台骨を担っているとみられていましたし、フランスからの亡命者がロンドンではじめていた絹織物業の業界を巻き込むことにも成功したからです。戦後史学では、この過程をもって、毛織物業界に代表される「産業資本」の、「前期的商業資本」の代表である東インド会社に対する勝利であり、だから、イギリスはここから産業革命の方向に進むのだとされています。しかし、抽象的な資本のカテゴリな

どという理屈ではなく、分かりやすい商品のレヴェルで考えると、産業革命は綿織物業でスタートするので、毛織物業界が勝利し、キャラコは使用そのものを禁止されたのでは、綿織物業の発展に結びつきません。

むしろ、キャラコ論争は、ヨーロッパに伝統的な毛織物とアジア発の綿織物という二種類の繊維製品の戦いでもあったわけで、その決着は、政府の禁止法などではなく、マーケットがつけるはずのものでした。じじつ、禁止二法はまったく効果がなく、事実上、イギリス国内での綿織物の人気は衰えることなく、その消費は拡大の一途をたどります。しかし、禁止法成立の直後には、多くの「キャラコ」がイギリスへの輸入を差し止められる事態がたしかに起こりました。そこで問題は、イギリスで差し止められたキャラコがどこにいったかです。貿易統計を仔細にみれば、その大半がアムステルダ

ム、つまりオランダにむかったことがわかります。イギリスが輸入を禁止しても、「ヨーロッパ」の需要は強く、ここでも、オランダとイギリスを一体の経済としてみれば、北西ヨーロッパ全体の毛織物市場はあいかわらず、コットンによって浸食されつづけていったことがわかります。時代そのものが、毛織物から綿織物への移行を強力に指し示していたのです。実際問題として、インドから輸入されたコットンのかんりの部分は、オランダへの再輸出を装って、イギリスへ再輸入された可能性もあります。

c 穀物と酒造り

一七世紀後半は、それまで、どちらかというとも多少とも穀物を輸入しがちであったイギリスが、穀物輸出国に転じる一方、かねてバルト海域からの穀物輸入に依存していたオランダは、その輸入の減少を経験しました。イギリスが穀物輸出

国に転じたのには、いくつもの理由がありました。一方では、農業革命、つまり、蕪の導入を軸とする新農法、いわゆるノーフォーク農法の採用があり、穀物の生産が激増しました。他方では、いわゆる「一七世紀の危機」を背景に、イギリスでも人口の増加率が落ち、ほぼ停滞状態となつて穀物需要が停滞したこと、第三には、王政復古以後の地主支配体制を象徴する穀物輸出奨励金制度——のちの穀物法につながる穀物生産者への優遇政策——の成立がありました。

一七世紀後半から一八世紀前半にかけてイギリスはこの穀物輸出能力を利用して、ポルトガルを最初の「自由貿易帝国植民地」とすることができましたが、同時に余剰穀物の大半はオランダに流れたことが判明しています。

この時代、オランダが頼っていたバルト海からの穀物輸入は、上述のように減少しました。にもかかわらず、この時代

のアムステルダムで穀物の騰貴は起こりませんでした。ベルギー式の農法（ノーフォーク農法）を採用して穀物の増産に成功したイギリスからの穀物輸出が、オランダでの穀物不足の出現を食い止めたからです。つまり、イギリスとオランダの経済を一体としてみれば、イギリスの農業革命の開始によって、全体としてのバルト海からの輸入穀物への依存度が低下した、という理解も成り立つのです。

イギリスの余剰穀物のうち、モルトは基本的に酒造りの原料でしたが、その多くがロッテルダム周辺で酒造りに用いられ、ジンとしてイギリスに再輸入されたことも知られています。一八世紀前半のイギリスが、有名なホガースの版画「ジン横町」やホガースがこの絵を描く動機となつた一七五一年の「ジン規制法」に象徴される「ジン時代」となったことも、両国の経済社会の「共生」ぶりを示しています。

d 密輸

一七世紀は、いわゆる私拿補が制限され、無国籍的な海賊の跋扈したカリブ海でも、各国による引き締めが進みます。しかし、一七三三年の特赦法でオランダを拠点とする密輸集団のきわめて活発な動きがあきらかになっており、イギリスとオランダの間は、ほとんど自由貿易の感を呈していたこともわかっています。

英語の表現に、「海にいく人びと」

(seafaring people) というのがあります。網野善彦さん流に言えば、「海辺の民」ということになりましょうか。貿易商人、漁師、船乗りなど、要するに海を相手に生計をたてている人びとのことです。イギリス海軍で三等水平をlandman——「陸野郎」とでも訳しますか——といいますが、内陸で暮らす人間を揶揄した、この言葉は、「海にいく人びと」の心意気を示しているのかと思います。

「海に行く人びと」の間では、国境や

国籍というものについて、内陸の人間とはあきらかに異なった見方があったように思われます。とくに、密輸については、政府の考え方とこの人たちの考え方は大きく異なっておりました。つまり、密輸を犯罪行為とする考えかたは、「海にく人びと」のあいだでは、近世のかなり のちまでなかったものと考えます。東部、東南部の密輸基地とオランダとのつながりは、とくに密接でした。

e アムステルダム＝ロンドン

金融枢軸

イギリスとオランダの経済を一体としてみるものが、もつとも重要な意味を持っているのは、金融の世界です。全体としては、一七世紀末以降、アムステルダムからロンドンへヨーロッパ世界の金融の重心が移行していきます。とくに、一七九四年のイングランド銀行創設以後、イギリスはいわゆる「財政（金融）革命」

を経験しますので、その影響力が急伸します。とはいえ、アムステルダムが決定的に力を失うのは、一七七〇年代の「西インド諸島恐慌」以後といわれており、それまでは、ロンドンとアムステルダムが一体となつて、ヨーロッパの金融を動かしていたことが知られています。

とくに、イギリスがイングランド銀行の設立を背景として国債を大量に発行するかたちで、重税と軍事支出の大きさを特徴とした「財政・軍事国家」を形成していくに際して、オランダ資本、つまり、いわゆるレヘンテ層の資金が大きな役割を果たしたことは、いまではひろく承認されています。金融の世界は、ほとんどその当初から、国境を問題にはしていないといふべきでしょう。

このようにみえますと、一七世紀のイギリスとオランダは、経済的には二つでひとつのようになっており、両者はつ

ねに連動して動いていることがわかります。国境は厳存しますが、今日のそのようなものではないし、国境を挟んだ両国は、セパレート・コースで競走をしていたわけでは毛頭ないのです。

II 庶民にとつての「国境」

——一六三五年の出国者調査

このように、経済的に「競争的補充」の関係にあつたイギリスとオランダ両国の間を、人びとはどのように移動したのでしょうか。以下、一六三五年以後にイギリスが実施した出国者調査から、その様子を検討しますが、この問題については、すでに公表したものがありますので、詳しくは、末尾の参考文献を参照していただければと思います。

近世イギリスの国境管理で、最も特徴的なことは、出国者管理が次第に強化されていくのに対して、入国者管理はほとんどなされていないということです。国

事文書概要 (CSP) の国内シリーズ (Domestic Series) を辿ると、一六世紀にはしばしばパスポート発行の記録が出てきます。今日、普通にいうパスポートがごく一部の上流人士に出されているほか、国内パスおよび北アフリカのバルバリ海賊対策としての「船舶パス」の三種があったこともわかります。「海に行く人びと」は、フリーであったと思われるですが、概して出国の取り締まりが強化されたのは、「人は富である」という「政治算術」的な発想から、出国は富の流失とみなされたからでしょう。実際、より徹底した一七七三年以降の出国調査の場合は、人口減少を食い止めるという明確な意図のもとに行われました。

出国に際して、パスポートの保持を義務付け、そのパスポートの発効権を私人にゆだねた一六三五年の調査も、全国的なものであったことが分かっていますが、じっさいの資料は散発的にしか残存して

いません。なかでも、ここで用いるのは、オランダの対岸にあたるイングランド東部のグレイトヤーマス港の史料のみです。ここには、オランダへ渡る多数の人びととアメリカに渡る少数の人びとが出現します。史料には、氏名、出生地、年齢、職業、渡航の目的や予定が書き込まれています。

かつて、ここに登場する出国者たちは、イギリス国内での弾圧に耐え切れず、アメリカに逃亡するピューリタンたちが、行き先を偽称したものだという学説がありました。しかし、記述の内容からして、それはありえせん。万一、そういうものが何ケースが含まれているとしても、ここに述べられた出国理由は、同時代の当局者が納得するような自然なものであつたはずで、当時の国境をこえる移動のイメージに反することはなかったと思われる。

出国者たちかあげた渡航理由を整理し、

一部を例示してみると、つぎのようになります。

▼イギリス人だが、ふた人はオランダに住んでいるので、自宅に帰るという者。この例が頻発しますので、イギリス生まれのイギリス人でオランダ在住の者がいかに多かったかが分かります。

◎ George Provender ウィルトシア生まれのフェルトメイカー、二四歳、デルフト在住。家族の待つ自宅へ帰る。

◎ John Allen ノーフォーク生まれの梳毛工。五四歳。母に会いにノリッジにきたが、自宅に帰る。

◎ Mitill Oldlett 三四歳のイギリス人仕立て職人。自宅のあるアムステルダムに帰る。

▼オランダに住んでいる親族の死亡など。自分はオランダに移住していなくても、

親族がオランダにいるという者がきわめて多いことを示しています。

◎ George Burton リンカンシア生まれの織布工。同地在住。四〇歳前後。亡父の遺産引き取りにオランダに赴くが、三ヶ月以内に帰国する。

◎ Nicol Bowlar サフオーク生まれで、同地の宿屋経営者。四三歳。亡父の遺産引き取りにオランダに行く。三ヶ月以内に帰国する。

▼オランダにいる親族と同居するという者。親族に呼ばれて、つぎつぎと移民する、今日の「連鎖移民」のかたちが、当時の両国間でみられたことを示しています。

◎ Mary Willement 三〇歳。ロッテルダム在住の夫と同居するため。

◎ Briditt Mouse 五〇歳。オランダ在

住の夫と同居するため。独身の妹三六歳も同行。

(前後の例からすると、夫は三〇年戦争中の大陸で、兵士である可能性が高い)。

◎ Thomas Baxter ノリッジ生まれだが、ライデン在住の織布工。四〇歳。友人に会いにイギリスにきていたが、帰国。

▼「生活の糧」を求めて行くという者。オランダの方が賃金レヴェルが高かったことを如実に示しています。

◎ Isacke Dethes, ノリッジ在住。生活の糧を求めてオランダに行く。

◎ Samuel Brown ノリッジの醸造業者。四六歳。この商売で生活の糧を得るべくオランダに行き、定住のつもりであるが、成功しなければ帰国する。

◎ Thomas Waller ヨークシアのハズバ

ンドマン。四〇歳前後。生活の糧を求めてオランダに行く。

▼技術習得のため。オランダの方が技術水準が高く、イギリスの若者にとつて、修行の場でありえたことを示しているでしょう。

◎ Toby Steeple ノリッジ生まれの織布工。二八歳前後。自分の職業の腕を磨きにオランダへ。

◎ George Burton ノーフオークの独身の梳毛工。二五歳前後。職業上の腕を磨きに行き、六か月で帰国する。

◎ 氏名不詳 本屋の修業にオランダへ。
◎ Joseph Chesten ノーフオークの桶屋。一九歳前後で独身。オランダに行って現地を見学し、自分の職種について知識を蓄えたい。一年で帰国する。

▼イギリスは不況で就職難であるからと

いう者。当時は、中・短期的にも、オランダが好況で、イギリスは不況でした。とくに、グレイト・ヤーマスを含むイーストアングリア地区の毛織物業地帯(東部毛織物業地帯)は、サマセットシアやドーセットシアなどの西部毛織物業地帯とともに、深刻な不況を経験していたことが知られています。戦後史学が簡単に指定したようなイギリス毛織物業の順調な発展とオランダのその一方的衰退というイメージでは、こうした庶民の移動パターンはまったく説明できません。

◎ William Cole ノリッジの織布工。二四歳。イギリスでまじな仕事が見つかるまで、同年齢の妻とともにロッテルダムで仕事を探す。

◎ Edward Shelly 二二歳の煙草パイプ職人。ロンドン生まれ、オランダに行つて仕事で職を探す。

◎ William Harding スウオントン・アボット在の一八歳の織布工。この土地で景気が回復するまで、オランダに行つて仕事を探す。

◎ Mihill Greenwood ノリッジの織布工。三六歳。イギリスではあまりにも仕事が少ないので、同年齢の妻アンおよび奉公人とともに、オランダにわたり仕事をを探す。イギリスで仕事が増えてくれば戻る。

こうしてみると、当時のイギリス民衆には、オランダは技術水準が高く、経済も好調そうに見えたことがわかります。

「生活の糧を求めた」のは、つまり、高給に引かれたということでもあります。不況のイギリスよりは就職しやすいとみなされたことも事実でしょう。

こうした決断の背景には、もともと青年時代に技術修業にオランダに行った経験のある者も多かったことが推測されま

す。イギリスとオランダのあいだには、庶民生活のレヴェルではほとんどバリエーションというべきものはなく、田舎生まれの若者や、地方で失業したり、困窮したりした貧民が、かすかな希望の灯をみて、ロンドンに出たのとはほとんど同じ様子がここにみえます。それどころか、農村育ちのイギリスの若者にとっては、徒弟修行のような、ライフサイクルの一環としての「奉公」先としても、オランダはロンドンと同じようにみえていたものと思われま

おわりに

最後に大きなことをひとつ申し上げますが、歴史の見方として、「各国史の寄せ集め」でない「ヨーロッパ史」というものを書く方法が、いまだにみつかっていません。ランダス『西ヨーロッパ工業史』など、その試みはありましたが、十分とはいえません。「東アジア」の歴史もまた同じ

でしょう。とりあえず、オランダとイギリスの近世経済・社会史は、このようにすれば、一体としてみることができるとは、一体ではないでしょうか。そこにあるのは、世界システムそのものが、中核と周辺によつてできているのと同じように、相互

に補完的な、いわば世界システムの下位システムの一つをなす構造体として、分析することができると思います。

本報告の各部分の詳細については、下記の拙稿を参照してください。

- ・「穀物・キャラコ・資金の国際移動——一七、八世紀の英・蘭関係」板垣雄三ほか編『移動と交流』（シリーズ・世界史への問い、3）、岩波書店、一九九〇年所収
- ・「国境なき民衆のライフサイクル——一六三〇年代のイーストアングリアとオランダ」前川和也編著『空間と移動の社会史』ミネルヴァ書房、二〇〇九年所収